

作品梗概集 7

*初演年代は、原則としてダイエルコウフ＝オルスボエルに拠ったが、他の研究者の推定に基づく場合はその名前を年代の後に記した。

*梗概集の後に索引を付した。

Rotrou : *L'Hypochondriaque ou le Mort amoureux*

ジャンル	五幕韻文悲喜劇
初演	1628 年後半 オテル・ド・ブルゴーニュ座
出版	1631 年
出典	不明。田園劇の要素は多々あり。

ジャン・ロトルー、19 歳のデビュー作である。出版の際、作者は序文で「優れた劇詩人はおおぜいいる。が、20 歳で、となると難しい」と謙遜（もちろん自負を込めた）をしているが、初演の翌年（1629 年）に座付き作者としてブルゴーニュ座と正式契約を交わしたという事実は、興行的にはこの処女作は成功をおさめたことを物語っていよう。

『憂鬱症患者あるいは恋する死者』は、処女作の短所と長所を合わせもっている。つまり、古典劇の諸規則に無配慮であるのはロトルーの他の悲喜劇も同様であるから考慮に入れないとしても、構成面でのアクションのバランスが非常に悪く、大団円に至るプロセスの処理が無頓着すぎる一方で、劇作家としての作者の情熱と野心が十分にうかがえる作品なのである。最も力点がおかれている部分は、主人公である憂鬱症患者（クロリダン）の狂気の世界の、従来になく詳細な描写である。正気（クレオニス）と狂気（クロリダン）とのバロック的（屁）理屈を駆使した論争も楽しい。ただ、五幕最終場面のショック療法のアイデアについては、その精神（死の死は生）は確かにロトルー好みであり時代の嗜好でもあるのだが、具体的なアクションは作者の独創とは思えない。スペイン産の作品あたりからの借用であろうか。

[第一幕] クロリダン Cloridan とペルシッド Perside は、一時も離れられないほどの相愛の仲である。それなのに父親の命令で、クロリダンは遠くコリントまで出かけねばならなくなった。ペルシッドは愛のしるしとして、自分の髪でこしらえたブレスレットを渡す。一方、コリント

にほど近い森の城に住むクレオニス Cléonice は、リジドール Lisidor の執拗な口説きを冷たくあしらっている。彼女の冷淡さに業をにやしたリジドールは、友人を説得して彼女を誘拐する計画を企てる。

[第二幕] クレオニスは森の中をひとり散策している。自然のもたらす様々な現象に不吉な予兆を読み取りながらも、彼女は睡魔におそわれて眠り込んでしまう。そこにリジドールと友人。リジドールはチャンスとばかり眠る彼女に接吻し、友人がその美に心を動かされないで罵る。目を覚ました彼女に、彼は乳房に接吻させるとせまるが、頑に彼女が拒むので暴力で犯そうとする。折よく通りかかったクロリダン、リジドールとその友人をあっさり切り殺してしまった。この勇者にクレオニスはたちまち夢中。困ったクロリダンは故郷の恋人の存在を告げるが、彼女はせめて命と名誉の恩人にふさわしいおもてなしを、と強引に城に誘う。他方ペルシッドは、いとしい恋人への愛の手紙を小姓に託していた。

[第三幕] ところがこの小姓は、受取人に会う前にクレオニスに出会ってしまい、買収されて、手紙の一部、l'amour を la mort に書き換えることに同意。受け取ったクロリダンは、恋人の死を確信して失神してしまう。慌てた小姓が水を汲んで戻ってくると、既に彼は狂気の世界に入っていた。そこは肉体を失った、魂だけの死者たちの世界であり、したがってクレオニスの魂もどこかに存在しているに違いない、と彼はあてどもなく捜し始める。策略の成果は、と様子を見にきたクレオニスは、彼の狂態に狼狽し、これは自分から逃れるための佯狂だと判断する。さてペルシッドは、かつてコリント近くで出会った美女(クレオニス)への恋に悩む従兄弟のアリアスト Aliaste と共に、それぞれの恋の行方を知るため、女占い師に会いにゆく。結果は、ペルシッドは死者と結ばれ、アリアストには死者のライヴァルがいる、というものだった。不安になった二人は、コリントへ向けて旅立つ計画を立てる。

[第四幕] クロリダンは恋人の魂を追い求めるのに疲れ、床についている。クレオニスの父親が見舞いにきてもライヴァルとみなし、怒らせてしまう。「地獄中がライヴァルだらけだ!」。クレオニスは、クロリダンの身体感覚器官が生者と同様に機能しているのを指摘して、理性的に「佯狂」を論破しようと試みるが、クロリダンは、それは魂が感覚の記憶を保持しているからであり、死んでいるのに自分を死者と認めないあなたこそ狂人だ、と譲らない。一方ペルシッドは、アリアストと衣服を交換して両親を騙し、出立に成功していた。

[第五幕] ペルシッドとアリアストは、森の中で木に縛りつけられている小姓を発見。小姓は盗賊に身ぐるみはがれたのだった。救出された彼は、自らの裏切りのせいでクロリダンを狂気に陥った経緯を告白する。さて錯乱が高じたクロリダンは、棺の中に入り込んでしまい、すっかり死者の気分である。事ここに至ってクレオニスは、この狂気を真なるものだと認識し、彼への熱狂から脱却する。かつて憎からぬ思いを抱いたアリアストのことを思い出していると、

当人がペルシッドと共に訪ねてきた。二組の恋人たちの再会。だがクロリダン「ペルシッドの魂」との再会には狂喜するが、ここが死者の世界ではないことを認めようとはしない。アリアストは一計を案じ、偽の死者が入った棺を二つ、運び込ませる。さらに音楽隊を呼び寄せ、「音楽の神秘的な力」によって今からこの死者たちを蘇らせる、彼らと共に君も生き返るだろう、と宣言。楽士たちが優美に楽器をかき鳴らし、歌手たちが陽気に歌いだす。やがて死者たちが身じろぎし、動きだした！しかし、クロリダンだけはまだ蘇生した気持ちにならない。と、死者のひとりが「自分たちをつらい現実に戻した張本人」のクロリダンにピストルを向け、発砲した。それはもちろん空砲だったが、ショックを受けた彼はようやく理性を取り戻した。「死の恐怖」によって、クロリダンは死から生還したのである。

(鈴木美穂)

Du Ryer: *Alcionée*

ジャンル	五幕韻文悲劇
初演	1637年 マレー座 大成功
初版	1640年
出典	Le Chant XXXIV du <i>Roland furieux</i> de l'Arioste (Lanson)

コルネイユの *Le Cid* と同じ年に初演されたデュ・リエのこの悲劇は当時の政治家、文人の大きな注目を牽き、ドービニヤックもその語りと感情の力強さを称賛している。リディアの武将アルシオネ(Alcionée)は数々の戦で武勲をたて有名になる。彼は王女リディー(Lydie)を愛し、自分も愛されていると思い、国王に結婚を申し込むが身分が低いために拒絶される。このため彼は国王に謀叛し、敵の諸王と組んでリディア国内を荒廃させる。敗れた国王は王権保持のためにアルシオネに妥協して王女を与えると約束した。アルシオネは王の約束を信じ、かつての同盟国を敵に回してリディアを復権させる。しかしアルシオネは再度結婚を申込みが王にもリディーにも拒否され、盟友にも見放されて、絶望の果てに自殺する。この作品は、政治問題、例えば王は謀叛した臣下にたいして如何なる態度を採るべきか、貴族でない身分の低い臣下は武勲があっても王女と結婚出来ないのか、王は国家のためにはどんな約束でも破ることが出来るのか、などの問題を提起している。バロック時代のこの悲劇はすでに古典主義時代を予告するように、三単一は厳守され、内容的にも後年のコルネイユの *Suréna* やラシーヌの作品、特に *Andromaque* の萌芽をはらんでいると言われている。

[第一幕] 戦は終わった。王女リディーは王宮の一室で侍女に、アルシオネはわたしが彼を愛していると思っているが、王に反逆した罪は許せない、彼は王権を手に入れるためにわたしの愛を求めた、彼には必ず復讐すると語る。しかし独白の中で彼女は、彼を心から愛しているが身分の低い彼を選べば自分は高貴な血筋を裏切ることになる、と恋と名誉との間の葛藤の苦しみ吐露する。一方アルシオネは親友アシャート(Achate)にたいし、自分が心から愛しているのはリディーその人であり、王座には何の執着もない、王は彼女をわたしに約束してくれたと言う。アシャートは、国王は法律でも約束でも反故に出来るものだ、本当にリディーを望むなら武器を手にしてでもその場で結婚すべきであった、こんど再び結婚を要求して拒否されたら王侯たちも敵にまわすことになると忠告。そこに現れた貴族アルシール(Alcire)はアルシオネに、君と王女の結婚の噂が広まっているが、王は反対するだろう、君には権力がないから王位には就けないだろう、などと挑発的なことを言う。

[第二幕] リディーは父王にたいして内心を隠し、あなたが約束したのなら身分の低い臣下アルシオネでも愛しましょう、あなたは王権を確保するために彼に娘を与えると約束した、すべてはあなたの責任、と父に言う。王はアルシオネがこの国を愛しているというのは王権を握るためではなく、お前を手に入れたいため、彼は二度と愚かな要求はしないだろうと強調する。しかし国王に会ったアルシオネは、約束を守るのが王の掟、あなたの約束だけが頼りだとリディーとの結婚を懇願する。これにたいして王は、わたしがお前に与えた地位で満足出来ないのか、お前の反乱が国内をどのように荒廃させたか、わたしは国民の為を思って娘を約束したが、お前の愛を尊敬に変えよ、とアルシオネの願いを拒否する構えを見せる。しかしアルシオネの強い態度に屈して、もし娘が同意したらそれに従う、と王は折れる。

[第三幕] リディーはスタンスのなかで、アルシオネの罪への憎しみは消えないが本当は彼を心から愛していると語る。彼女と再会したアルシオネは、王があなたが同意したら結婚の約束を果たすと言っている、わたしの願いを聞いてくれと申し出る。リディーは内心を隠して、わたしは王の決定に従うだけです、不平は言わない、と答える。アルシオネはその答えに希望を見だし、再び王と会うために退場。そこに現れた王は娘に、アルシオネが希望を持っているようだが名誉と義務の名において、お前はこの話は無いものと考えて拒絶してくれ、と言う。リディーは、同意したのはあなたではないか、と反論する。しかし王は同意したのはお前が反対するのを見越してのこと、王女であるおまえは品位を持って罪ある臣下との結婚に反対してほしい、と言う。リディーの心は次第に拒否に傾く。再度のアルシオネの懇願にたいし、彼女は今度は明白に拒絶の態度を示す。あなたの罪は許せない、あなたは罪を後悔したから宮廷に復権できたが、だからといってわたしがあなたを愛さなければならない理由はない。かつてあ

なたを愛したとしても、それはおろかな自分への罰をいま思い知らされたに過ぎない、と。このように、アルシオネはリディーの心の動揺に振り回される。

[第四幕] 絶望したアルシオネは盟友と頼むカリストレーヌやアルシールに協力を求めるが、彼らは協力を拒否し、アルシオネに国外退去を勧める。国王に再び会ったアルシオネは、わたしの恋は死ぬまで消えない、わたしは数々の暴挙を行ったが、王への忠誠心が失われたとは考えないで欲しい、出国にせよ、死ぬにせよ、過酷な運命に従います、と訴えるが、王はお前の運命を満足させる所へ何処へでも行くがよいと冷たく突き放す。

[第五幕] リディーは彼を冷たく拒絶したことを後悔している。そこに侍女が現れ、アルシオネが王の面前で自殺をはかり、死ぬまでにリディーに一目会いたいと願い、王がこれを許した、と言う。連れてこられたアルシオネはリディーの足元にすがり、わたしはあなたが生きよというから生きてきた、戦に勝てと命じたから勝った、罪を咎めるあなたの厳しい態度に従って死んでゆく、と訴える。リディーはアルシオネに、わたしの涙を信じてくれますか、天がわたしに課した虚しい名誉の為にわたしはあなたに酷い態度を見せた、と初めて心情を吐露する。アルシオネは「あなたの涙に報われた。一筋のあなたの愛情がわたしの死の栄光となった、」と言って息絶える。死したアルシオネを前にリディーは言う。わたしの冷酷な態度であなたにこんな無残な死を迎えさせた、あなたの死後もあなたを愛し続けるのが天罰としてわたしに課された掟です。

(浜野トキ)

Quinault: *Amalassonte*

ジャンル	五幕韻文喜悲劇
初演	1657年11月 オテル・ド・ブルゴーニュ座 大成功
初版	1658年
出典	Blondus (probably) (Lancaster) 6世紀のゴートにまつわる物語

この作品は喜悲劇が衰退に向っていた時期に書かれたが大いに観衆に受けた。ゴートとイタリアの女王アマラゾンテ(Amalassonte)は摂政テウディオン(Theudion)の息子テオダ(Théodat)と愛し合っているが、二人の恋は様々な妨害に会う。テオダは敵の謀略のために、罪を着せられ、女王には嫉妬され、憎まれ遂に毒殺されかけるが、最後は無実が証明され、二人がめでたく結ばれる。二通のテオダ宛の手紙が二通とも他人に読まれる。また彼は二度も殺されかける

がその度に難を逃れて無事生還。一方女王はテオダの謀叛、裏切りの数々を見せつけられ、疑い、怒り、絶望に陥るが、彼への未練が断ち切れずに決定的な態度が採れずに苦しむ。動きの多いこの作品には取り違えあり、コミックあり、ファンタジーあり、サスペンスあり、洗練された恋の口説きがあるが、一方シニスムと残酷さもある悲劇性の濃い作品となっている。意外な事件が継起するが、全て偶然のなせるわざ、二人の恋人の運命や如何にと当時の観客を引きつけたことが想像される。

[第一幕] 場所は宮廷内の控えの間。クロデジル公(Clodésile) はかつて父を女王アマラゾンに殺されたが、彼は女王と結婚して彼女を征服して復讐を果たそうと考える。そのために先ずライヴァルであるテオダの失墜を友アルサモン(Arsamon) と画策する。アルサモンはクロデジルの妹アマルフレード(Amalfrède) を恋しているが、彼女の方はテオダを愛している。クロデジルは女王の支配するイタリアの征服を狙っている東ローマ帝国のユスティニアヌス皇帝と密かに通じ、テオダが女王を失墜させるために皇帝と密約を結んでいる旨のテオダ宛ての手紙を皇帝に書かせ、これを事前に摂政と女王に読ませるように仕組む。摂政は息子の裏切りに怒り、彼を宮廷内に幽閉する。テオダはアマルフレードの恋心に無関心で、自分の不幸を嘆く女王への恋文を彼女に託す。アマルフレードは手紙を読むが女王に渡さない。

[第二幕] 女王は裏切りを見せつけられてもテオダへの愛情からその態度を決めかね、テオダに会って問いただす。テオダは皇帝の手紙を見て驚愕。テオダ宛てのこの手紙は「帝国を共有するとかねての約束通り直ちに女王とローマを自分の支配下に引き渡して貰いたい」というもの。テオダはこれは陰謀であり自分は潔白だ、だがこの陰謀を信ずる女王を糾弾することは女王の誤りをあばくもの、そのくらいなら自分はむしろ死を選ぶと言って、自己を正当化せずに、却って女王への尊敬と恋心を明かす。女王は恋の告白にほだされて、かねてからお前と結婚して、王座を譲りたかったと言い、結婚と王権委譲について直ちに閣議招集を命ずる。そこに現れたアマルフレードは、テオダが彼女に託した女王宛ての手紙を故意に落として女王に読ませ、それをテオダがアマルフレードに宛てた恋文だと思わせる。女王はテオダを裏切り者と怒り、閣議は取り止め、テオダは以後女王に面会出来ない。

[第三幕] アマルフレードは兄クロデジルにテオダを愛していると告げ、二人でテオダと女王との結婚を妨げ、王位を奪う点で共鳴する。しかしテオダを殺してまでも、とためらう妹を説得し、クロデジルはテオダ殺害を計画する。テオダは女王の命令だと言われ、アルサモンに導かれて女王に会いに行くが、暗い廊下で待ち伏せしていたクロデジルはアルサモンをテオダと取り違えて殺す。返り血を浴びたテオダを、女王の部屋から出てきた摂政が見て、犯人は息子だと思う。一方クロデジルはテオダを殺したと妹に告げると、彼女は喜ぶどころか兄を恨む。また女王にもテオダが殺されたが犯人は誰だか分からない、と告げると、テオダを恨んでいた

女王も悲嘆に暮れ、テオダを殺した者を死刑にするとする。そこにテオダが生還し、殺したのはこのクロデジルだと互いに激しい口論になる。テオダはこのとき女王が厳しい態度を採っているのに恐れをなし、アマルフレードにばかり話しかけるが、これを見て女王が嫉妬する。女王はテオダに国外追放を命ずるが、その前にもう一度会いたいと思う。

【第四幕】テオダは自分の恋を女王に伝えてくれとアマルフレードに言って退場。そこに現れた女王はテオダが自分を見て逃げたと思ひ込むが、アマルフレードは女王に「テオダはあなたを愛しているふりをしているだけで、本当はわたしを愛しています」と讒言する。女王はそれでもまだ恋心を捨てきれない。悩みのなかでやがて彼女はまどろむ。そこにテオダが現れ、国を去る前に女王にひと目会いたいが目覚めるまで待とう、と言う。アマルフレードは嘘が発覚するのを恐れ、テオダの剣を抜き取り、女王を刺そうとするが、この時、女王が目覚めたので剣をテオダに返して、あたかも彼女が女王を殺そうとしているように見せる。女王の驚愕と怒り。テオダが弁明しても無駄。アマルフレードはテオダに罪を着せて、彼は将来わたしを女王にと考えている、と言う。女王は遂に決心し、召使を通じてテオダ宛ての手紙をクロデジルに託す。召使はクロデジルに、この手紙はテオダ以外の者は絶対に読んではならないと女王の命令を伝える。

【第五幕】テオダの命運を気にかけているアマルフレードに女王は、あの手紙には強い毒薬が塗られており、それを開くとテオダは必ず死ぬと残酷な計画を明かす。女王のまえに摂政が現れ、「罪人は死んだ」と報告する。女王は死んだのはテオダだと思ひ込みそれ以上の報告を聞くことを拒絶。そこにすでに毒をあおいだアマルフレードが現れ、女王にむかい、皇帝と通じてあなたの失墜を企てた手紙の事件、アルサモンの殺害事件はすべて兄クロデジルがやったこと、女王を殺そうとしたのはこのわたし、テオダは全く潔白、わたしはテオダを愛している、罪のないテオダを殺したあなたの罪は重い、と言って死ぬ。女王は嘆きと後悔のあまり失神。そこにテオダが生還し、テオダ宛ての女王の手紙をクロデジルが読み、手紙の毒のために死んだ事の顛末を報告する。

(浜野トキ)

Quinault: *Astrate, roi de Tyr*

ジャンル	五幕韻文悲劇
初演	1664 年末(ないし 1665 年始め) オテル・ド・ブルゴーニュ座 大成功
初版	1665 年
出典	<i>Grand Cyrus</i> の中の一話: <i>Sésostris et Timarète</i> がヒントを与えたのではないか。(Lancaster)

チロスの女王エリーズ(Elise)は、チロスの正当な王位を篡奪した父の後を引き継いで王位に就いたが、王権を維持するために、正当な王とその王子二人を殺させた。だが三番目の王子の行方が知れず不安を抱く。かつてはチロスの正当な王の臣下として仕え、今も女王エリーズを補佐しているシシエ侯(Sichée)は第三王子アストラート(Astrate)を密かにわが子として宮廷内で育てており、将来正当な王座に就けたいと狙っている。しかしエリーズとアストラートは敵同志とは知らずに愛し合う。シシエが如何にして敵である現王権を倒してアストラートを王位に就かせようとするか、彼の老獪な手口がドラマの軸となっているが、それにエリーズの婚約者アジェノール(Agénor)とアストラートとの対立が絡み合う。自己の出生を知り、恋する女王が敵であると分かったアストラートの悲運と、愛する人から復讐を受けなければならないエリーズの絶望を扱ったこの作品はまさに「新オイディプス王」とも言われている。この作品はキノー独特のすり替えやサスペンスやどんでん返しに富んでいるが、特に政治と恋愛との絡み合い、結婚と恋愛の関係に新しい視点を示唆している点で興味深い。

[第一幕] 場所は宮廷内の一室。父王が娘エリーズにと決めた婚約者アジェノールは、シリヤ軍との戦いでチロスを守ったアストラートの武勲を讃える。アストラートは王位には関心無く、ひたすらエリーズを愛しているが、これは王女の婚約者アジェノールにたいする罪ではないかと悩む。だが自信満々のアジェノールはこれを問題にしない。そこにシシエが現れアジェノールにたいし、エリーズが結婚を延期したい意向だと伝える。アジェノールはすべて女王の決定に任せると寛大な態度を装う。老練なシシエはアジェノールにたいしては、女王エリーズは権力の受託者に過ぎず、宮廷は男性の王を望んでいると言って女王への反旗を煽動し、他方女王にたいしては、アジェノールの真の目的は王権取得だと警告する。エリーズは自分が心から愛しているのは武勲と徳を備えているあなたの息子アストラートであり、彼こそが王位に相応しいとその恋をシシエに告げる。シシエの驚愕。彼女は、先王の三番目の王子を見つけて殺すつもりだが、全ては神託によって解明しようと言う。

[第二幕] 神託は「敵は宮廷内にあり、やがて分かるが、その場合、女王は権力も生命も失う」という厳しいもの。女王は恐れずに神の命に従うと言う。一方彼女は愛の選択は自由だ、自分が真に愛しているのはアジェノールではなく、アストラートだと侍女に告げる。アストラートはエリーズにたいし、宮廷内にひそむ敵を挙げることを誓い、密かに女王を愛しているが、すでに婚約している女王にたいしてこれは罪深い恋だと告白する。女王もアストラートへの愛を告白し、結婚を考えていると言う。しかしアストラートは婚約者アジェノールがいるのではないかとためらう。

[第三幕] アジェノールはアストラートに、女王はお前を愛しているが、彼女は「王権の指輪」をわたしに与え、わたしと結婚する事になった、愛が無くてもひとたび女王と結婚して王権を手に入れば、女王の愛も享受出来る、と仄めかす。アストラートは、それでは結婚しても女王の心が二つに分かれてしまう、あなたと結婚しても女王の心はわたしのものだ、と主張するが、アジェノールはお前は勝手に虚しい勝利を味わうがよいと突き放す。実は「王権の指輪」は女王がアストラートに渡すようにとアジェノールに委ねたもの。二人の争いが激しくなり、アジェノールは「王権の指輪」を握っているのをたてにアストラートを逮捕させようとする。しかし警備隊長は女王の命令だとしてアジェノールを逮捕し、「王権の指輪」をアストラートに渡し、女王は王権をあなたに委譲した、と告げる。だがシシェはアストラートに、女王との結婚は諦めよ、いま王位篡奪者への復讐の謀議が行われており、その首謀者はまさにこのわたしだと告げる。アストラートはシシェを振り切って急ぎ女王に会いに行く。

[第四幕] アストラートはシシェに、女王はわたしの立場を思って、あなたの行動を許したが、謀議の背後にいる真の「敵」を殺すと言っている。その敵の名前を知らせて欲しいと頼む。シシェはあなたが罪ある女王と結婚する以上、すべてを言わなければならない、として先王の残した遺言状を見せる。それには「敵の手を逃れた王子は機会が来たら復讐せよ。その王子の名はシシェを父と信じているアストラートである。」とある。アストラートの驚愕。シシェは言う。エリーズの父が王座を奪った時わたしは死んだ息子の名を付けてあなたを自分の子として育てた。あなたは女王を罰して父王の復讐するのが義務だ、と。そこにエリーズが現れ、国民はわたしにたいし武装蜂起している、真の敵は現れたかと尋ねる。遂にアストラートは、その生き残りの敵こそこのわたしだ、あなたの滅亡を義務付けられている、と告げる。女王は、わたしが王座に執着したのもすべてそれをあなたにあげるため、あなたは正当な王の後継者、あなたの手にかかって死ぬのは本望、と嘆く。そこに使者が着て、暴徒がアジェノールを殺し、その責任を女王に着せている、と国民蜂起の状況を報告する。しかしアストラートはどんな事があっても女王は守る、と誓う。

[第五幕] アストラートはシシェにたいしてわたしが誰であるか早く国民に発表せよ、と詰め寄るが、シシェは女王にたいする復讐を遂げなければあなたを王位に就けられないと彼の願いを退ける。アストラートはこの非情な心を動かすことが出来ないならば死んだほうがよい、とシシェの剣を抜いて自殺しようとするが止められる。使者がきて、国民は新王の出現をこれ以上待てない、と報告。アストラートは遂に新王はまさにこのわたしだ、と宣言する。そこにすでに服毒しているエリーズが現れ、もう復讐は果たされた、わたしはあなたに罪を犯させずに自分の手で復讐をしたかった、と言って倒れる。アストラートは衝撃のあまり気を失う。シシェは彼を救うために走る。

(浜野トキ)

Tristan L'Hermite : *Le Parasite*

ジャンル	五幕韻文喜劇
初演	1653年(推定) マレー座あるいはオテル・ド・ブルゴーニュ座
出版	1654年
出典	Fornaris: <i>Angelica</i>

ランカスターは、登場人物のひとりキャピタン(ほら吹き兵士)がマタモールと名づけられていることからマレー座で初演されたと推測し、アブラハムはマタモール役者ベルモールがオテル・ド・ブルゴーニュ座に移籍したあとなのでオテルで初演されたと考える。出典はフォルナリスの『アンジェリカ』。しかしフォルナリスは先行作品 *Olimpia* (Della Porta 作) を、またデラ・ポルタ自身はプラウトゥスを参考している。またこののちに書かれたモリエールの『粗忽者』は反対に『寄食者』から影響を受けたと指摘されている。場所はマニーユの家の前一ヶ所に固定され、時間も24時間以内。リエゾンも守られている。ランカスターも述べるように先行作品に比べ筋は単純になったが、単一ではない。ロトルーは死去、コルネイユは喜劇をすでに放棄、モリエールは作品発表前という端境期にトリスタンはこの喜劇を書いたのだが、つかの間であれそれなりの成功は収めることができた。若い恋人たちが中心に置かれているが、興味の大半は侍女のフェニス、ほら吹き兵士マタモール、いつも腹ぺこの寄食者フリプズスに集中。寄食者という人物は古代からタイプは異なるものの存在しており、登場人物じたいに新しさはない。面白さは人物たちが言葉で紡ぎだす幻想の世界にある。

[第一幕] 早朝、パリのマニーユ (Manille) の家の玄関先。小間使いのフェニス (Phenice) が不眠を嘆いている。この家の娘リュサンド (Lucinde) はリザンドル (Lisandre) と恋仲なのに、母マニーユの命によって他の男と明日、結婚させられそうなのだ。窮地を脱するための計画がフェニスの手で用意された。彼女はまず、食いしん坊の居候フリプズス (Fripesauces) に、計画にかかわるある用事を、食べ物と交換で頼む。じつは、マニーユは14年前、マルセイユに住んでいたときに舟の事故で、夫アルシドール (Alcidor) と息子(2歳)を失っている。二人の生死は確認されていない。フェニスの計画とは、リザンドルがその息子になりすまして母マニーユにあい、明日の結婚を延期させようというものだ。フリプズスには、リザンドルの後押しをしてもらう心づもり。腹ごしらえのすんだフリプズスが約束をはたしにでかけようとすると、花婿に選ばれた空えばり屋のキャピタン (Le Capitan) がそばにいるのに気づく。キャピ

タンの手柄話と、フリプズによる食べ物話が展開。その後ひとりになったキャピタンは、目前に婚約者リュサンドを認めるが、冷たくあしらわれ不満をつのらせる。

【第二幕】リザンドルは恋人リュサンドから、不幸がおきたことを知らせる手紙を受け取ったところ。彼は美女を手に入れるか、命を失うかの瀬戸際に自分はいると理解する。彼自身が父から学業に専念するよう命じられているし、また金銭面をみても、二人がめでたく結ばれる可能性はない。そのとき彼はパリに上京してきた友人のペリアント (Periante) に声をかけられ、父リュシル (Lucille) も仕事でパリに来ていることを知る。また、リュサンドに近々結婚するという噂があることも、知らされる。相手はキャピタンだとわかったリザンドルは、絶望の淵に陥るが、そこに来たフリプズからリュサンドの手紙を受けとり、朗報を得て有頂天になる。さらにフリプズから、仔細な計画を知らされる。ところがそこにキャピタンが通りかかり、あわやこの二人のあいだで決闘が行われそうになる。リュサンドとリザンドルとが秘密裏に結婚するという情報をキャピタンが得ていたからだった。結局キャピタンは、じきに雨が降ってきそうだと、すると剣の刃がさびる恐れも生じる、と考えて果たし合いを後日にまわし早々に退散してしまう。

【第三幕】フリプズは用意がすべて整ったのでご満悦。ひたすら食べ物や飲み物を思い描く。そこにリザンドルが仮面をつけてトルコの奴隷の姿でやってくる。偽の息子を演じきれるか不安。フリプズから細かな指示を受ける。家の扉をたたくとマニーユが娘たちとともに出てくる。母と息子が涙の対面をし、兄と妹が引きあわせられる。全員が家に入ろうとしたとき、フリプズがリザンドルを引きとめてお礼の金銭をせびる。もらったあと、リザンドルをひとり残し去る。折悪くこの仮装のリザンドルを、たまたま通りかかった父リュシルがみつけて怒り、何のまねかと詰問。息子はしらを切り、父を外にでてきたフェニスに任せて中に入る。父はフェニスに執拗に問いかけ、真実を知ろうとするが、徒労におわる。そこに来たキャピタンに、フェニスは応援を頼む。キャピタンは剣を振り回して喧嘩をリュシルにしかけるが、リュシルは落ち着いて対処し、反対に高貴の身分であることを明かしてキャピタンを味方につけ、その場を去る。玄関が騒々しいのでマニーユがでてくる。彼女は老人に剣を振り回したキャピタンの行為を責め、娘との結婚を破談にする。また息子 (=リザンドル) の興奮した様子を不審に思う。

【第四幕】腹の虫がおさまらないキャピタンは、巻き返しをはかる。ならばマニーユの夫をでっちあげればよいと思う。実はもう下男カスカレが適任の老人をみついていた。ところがこれが本物のアルシドールだった！アルシドールは涙ながらに過去の不幸を語るが、キャピタンはそれを反対に名演技と誤解する。いよいよアルシドールはマニーユの家に乗り込むが、まわりは誰も彼を主人と認めてくれない。キャピタンがともにいたのがかえってあだとなって、ペテ

ンだとされる。しかし海難事故の三日前にみた妻の悪夢のことをアルシドールが知っていたのが決め手となって、マニーユから夫と認知される。しかし夫妻はそれをまだ秘密にして、子供たちの法螺につきあうことにする。ところが、娘のリュサンドは、その場の様子から彼が父であると悟る。フェリスはアルシドールが家の中に闖入したら、ありとあらゆる物を投げて彼を撃退するつもりになる。フリプゾスは悪知恵の競いあいをして最終的にはすべてばらそうと覚悟する。一方夫とのあいだで打ち合わせのすんだマニーユは、息子シラール（＝リザンドル）についてフリプゾスに質問する。ところがフリプゾスは過って彼のことをリザンドルという本名で呼んでしまい、それがもとで法螺のすべてが暴露される。マニーユは他の三人をだまし続けるために彼を追放。この食いしん坊はそれまでに食べた食べ物の名をあげ、そのひとつひとつに別れの挨拶をする。

[第五幕] フリプゾスは運命の急変を嘆く。未練はもっぱら食べ物に。彼はリザンドルのもてなしを思いだし、ご馳走になった酒場の名を列挙する（当時のパリに実在）。そこに姿を現したキャピタンが、フリプゾスの力になることを約束。キャピタンはアルシドールを家の中から呼び出し、金持ちの主人にしてやったことへのお礼を要求するが、拒否される。キャピタンは状況から判断し、実は見知らぬ老人がアルシドール本人だったと悟り、当時パリで流行っていたブリオシュの人形劇に見られるようなすごい偶然がおきたと知る。さらにこの父からも結婚を拒否されたキャピタンは失望して、家が木っ端みじんに砕けて、マニーユの灰はバルバリーに飛んでいけばいいと言う。そしてパリが破滅して墓場と化せばよいと考える。しかし、ほかの娘を探せと言う下男の助言をあっさりと受け入れる。そこにリザンドルの父リュシールが、弓で武装した兵士を大勢つれて来る。彼はまだそこにたむろしていたフリプゾスから、まず息子が監獄に入れられていること、子どもの結婚をめぐるマニーユ夫妻が対立していることなどを知る。さらに夫妻の手柄や財産の多寡を知る。そしてリュシールは外に出てきた夫妻に自分がリザンドルの父であると名乗り出る。息子を救うためには何でもする、というリュシールにフリプゾスが機転をきかせて相愛の二人の結婚を承諾させて、ハッピーエンドへ。

(野池恵子)

作品梗概集

(ローマ数字は掲載号、アラビア数字はページを示す)

Bidar: <i>Hippolyte</i>	III 79	: <i>Astrate, roi de Tyr</i>	X 96
Boyer: <i>Ulysse dans l'île de Circe</i>	III 95	: <i>Atys</i>	VI 91
Corneille, Thomas		: <i>Cadmus et Hermione</i>	VI 86
: <i>Ariane</i>	III 89	: <i>Thésée</i>	VI 89
: <i>Bérénice</i>	IV 83	Mairet	
: <i>Camma</i>	III 88	: <i>Chryséide et Arimand</i>	IV 63
: <i>Circé</i>	III 98	: <i>Les Galanterie du duc d'Ossonne</i>	IV 68
: <i>Le Comte d'Essex</i>	VI 92	: <i>La Silvanire</i>	IV 66
: <i>Darius</i>	IV 85	: <i>La Sylvie</i>	IV 65
: <i>La Mort d'Achille</i>	III 9	Pradon: <i>Phèdre et Hippolyte</i>	III 81
: <i>La Mort de l'empereur Commode</i>	VI 83	Du Ryer: : <i>Alcionée</i>	X 92
: <i>Persée et Démetrius</i>	VI 85	Rotrou	
: <i>Timocrate</i>	IV 81	: <i>Agésilan de Colchos</i>	VII 94
Corneille, Pierre: <i>Andromède</i>	III 96	: <i>Amélie</i>	IX 79
Desfontaines: <i>Bélisaire</i>	VII 100	: <i>Antigone</i>	VI 80
Desmaretz de Saint-Sorlin: <i>Mirame</i>	VII 103	: <i>La Bague de l'Oubli</i>	III 83
de Visé, Donneau		: <i>La Belle Allphrède</i>	III 85
: <i>Les Amours de Bacchus et d'Ariane</i>	VII 107	: <i>Belisaire</i>	VIII 98
: <i>Les Amours de Venus et d'Adonis</i>	VII 106	: <i>Captifs ou les Esclaves</i>	IX 78
Garnier: <i>Hippolyte</i>	III 74	: <i>Célimène</i>	VIII 84
Gilbert		: <i>Cleagénor et Doristée</i>	IV 72
: <i>Les Amours de Diane et d'Endimion</i>	VII 105	: <i>Clorinde</i>	IX 81
: <i>Hypolite</i>	III 78	: <i>Cosroès</i>	IX 76
Gougenot: <i>La Fidelle Tromperie</i>	VII 96	: <i>Crisante</i>	VI 78
La Pineliere: <i>Hippolyte</i>	III 76	: <i>Diane</i>	VIII 82
L'Hermite de Vauzelle: <i>La chute de Phaéton</i>	III 94	: <i>Don Bernard de Cabrère</i>	VIII 80
Lully et Quinault		: <i>Filandre</i>	VIII 85
: <i>Alceste</i>	VI 88	: <i>Florimonde</i>	IX 82
: <i>Amalasanté</i>	X 94	: <i>L'Heureux Naufrage</i>	VIII 93

: <i>L'Hypochondriaque ou le Mort amoureux</i>	X90	: <i>La Marianne</i>	III 74
: <i>Iphigénie</i>	VI 81	: <i>La Mort de Chrispe</i>	IV 78
: <i>La Sœur</i>	VII 102	: <i>La Mort de Sénèque</i>	IV 77
: <i>Laure Persecutée</i>	III 86	: <i>Osman</i>	IV 80
: <i>Les Occasions perdues</i>	IV 70	: <i>Panthée</i>	IV 75
Tristan l'Herrnite		: <i>Le Parasite</i>	X 99
: <i>La Folie du sage</i>	IX 84		